週刊ＲＯ通信

――１９９９年――

奥井　禮喜

有限会社ライフビジョン

週刊ＲＯ通信　１９９９年　目次

この時代の社長訓示……6
大衆社会の今日……10
英雄待望論の危険……14
典型的お節介の厚生省感覚……16
ショーたるプロレスの醍醐味……20
誰のために誰が行動するのか……24
ＮＡＴＯは戦略を変更せよ……28
五回目のサバイバル・ウォーク……32
なんのための高学歴社会か……36
人事部は生きているのか……40
噛み合わない国旗・国歌論争……44
男女共同参画はいいけれど……48
日本という『人』の元気について……52

つまらぬアンケートするな……56
中高年の自殺が増えた……60
珍妙かつグロテスクな光景……64
再び自殺を考える……68
最近ホテル事情……74
日本的責任論……78
年金議論に大切なこと……82
高野連のナンセンスなセンス……86
自立・自助という言葉の乱用……90
個性的な人々と出来事……94
元気な先輩たちに会った……98
国士たる投機家の皆様へ……102
京都の静寂に憬れる……106
元気のエキスが見えてきた……110
最近拝金主義事情……114

当世浮世事情、秋の一日……118
「介護」自体のシェアが大事……122
そろそろ選挙が近いらしい……126
保険が掛けられぬ政治……130
中流の幻想と孤立……134
格好いいと思わないこと……138
お役人のピンボケ感覚……142
千年紀という言い方……146
二〇〇〇年問題……150
ブッチホン……154
春闘が舌戦ならぬ絶戦にならぬように……158
評価につながる仕事のさせ方……162
この際解散総選挙をやってください……166
話し合い解散というのは、ちと！……170
外形標準課税の内側……174

顎の話なんですが……178
独立開業に乾杯……182
またまた相対元気の蔓延……186
チェックオフ見直しが意味すること……190
なぜ春闘が「春闘」にならないか……194
「君たちはどう生きるか」……198
あとがき……203

No.二三五

この時代の社長訓示

新入社員が聞く社長訓示は年中行事ではない。ことに今のように混乱期ともいうべき時期に念願かなって社会人となった彼らにとって、その訓示は単なる会社社長のお喋りに止まらない。生涯にたった一度の新社会人としての訓示である。まさしく『一期一会』なのである。社長たる方々は訓示するに際して、身の引き締まる思いであったろうか。この際、大社長の気分で新入社員向け社長訓示の価値について考えてみたい。

社長訓示は、率直、期待、約束を意味するものでなくてはなるまい。粉飾決算がいけないように、訓示もまた粉飾されてはいけない。つまり、社長訓示はすでに社員として働いている人々に（事実として）支持されることが大事である。先輩社員諸氏は社長訓示を身につまされて聞いただろうか。先輩社員が感動せずして、新人が感動することはない。

新人たちが期待の持てる社長訓示でありたい。今はいかに厳しく、針の筵にありとしても、未来を共有する新入社員が「やるぞ」と期待を持てるものでなくてはならない。

期待の生まれないところに「がんばる」という決心が湧くわけはないのである。

社長訓示は、改めて新入社員に対して会社としての約束を闡明することが必要だ。人気企業であって、入りたい連中を入れてあげたのであっても、今日からは同志である。社長訓示は同志的盟約であり、固めの盃である。社長訓示は単なるアジテーションではない。

ある時、私は新人社員研修の講演をした。研修の最終講座であった。演壇から眺めれば、居眠りはしていないが、実に無感動、無表情である。一週間の新人研修で新人たちを「死にかけ」にしてしまったらしい。私は坊主ではないゆえお経を読むわけにもいかず、あれこれ喋るのであるけれど、なんせ死にかけた人々ゆえ容易には生き返らない。

「社長の訓示を覚えていますか。たしか『諸君！失敗を恐れず挑戦せよ』というものでしたね。しかし、私は皆さんのために忠告します。職場へ配属されても直ちに社長の言われたようにしないことですね」

「というのは、会社が挑戦的な風土を持っているのであれば、社長はそのように言われたでしょう。君たち、ぼやぼやしていたら置いていかれるぞ、とね。しかし、真実は違うんじゃないかな。だから本当は、この言葉はまず先輩社員たちに言いたいのでしょ

う。しかし、そうはなっていない。そこで君たち新人に挑戦せよと煽られた可能性がある」

「もし、皆さんが社長の言葉通りにがんばって、いささかの手柄を立てたとする。先輩たちはいい顔はしないでしょうね。逆に失敗すれば、他人の不幸は私の幸福とばかり、無理すんなよなとかなんとか慰めてもらえるかもしれない」

「まず君たちが職場でやることは、いったいどんな職場なのか、きちっと分かるまで慎重にやることだ。焦るほど時間がない訳じゃないんだから」

死にかけていた諸君が「あ、こいつ本音やな」と思ったらしく、後はきちんと講演を聴いてくれて、盛大な拍手で帰途についた。研修を主催していた人事部次長が、固辞するのに、私の鞄を持たせてくれ、と引ったくる。「いやあ、いい講演でした」。その手のヨイショにはなれているぞ。しかし、余りに熱意をこめてよかったと言うので「どこがよかったですか？」と聞いてしもうた。

「あの、社長のアジテーションに乗るなというくだりが、とくによかった。もし私が入社した時、誰かが言うてくれていたら、私の人生は変わっていた」とまで言うのである。いい気分で帰ったことは言うまでもない。

にもかかわらず、後、同社からの講演依頼は一度もない。頭にきて電話で次長をお願いしたら辞めていた。嘘のような本当の体験である。

今年の社長訓示は厳しいものが多かったように聞く。勝って兜の緒を締めよとて、好景気にこそ慎重な訓示がほしい。そして、今のように元気のない時には、突き放すような言辞ばかり並べずとも、「君らに期待してるぞ、私も先輩社員も必死や。いい会社を作って、来年はもっとたくさん仲間を迎え入れようぜ。だから…諸君！、失敗を恐れず挑戦せよ」と言うくらいの元気が会社トップたる社長にはほしいじゃないか。

あえて古い体験を語った所以である。

1999.4.5（月）

No.二三六

大衆社会の今日

個人主義と大衆社会とは切っても切れない関係にあるように思われる。封建社会においては、大衆は存在しても彼らの手に権力がまったくないから、大衆社会というようなものは存在しない。将棋の駒がなければ将棋をさすことはできないが、駒があっても駒たちには将棋ができないのであって、将棋をさすのは対局者であるのと同じだ。

だから封建社会においては、個人主義を生きられる人々は選ばれた一部の人々に過ぎず、全体としては大衆社会ではない。

大衆社会が成立するようになったのは、常識的には二〇世紀の先進国である。社会的な生産が安定的に供給され、圧倒的な人々がそれを享受できるようになってから大衆社会が成立する。大衆社会は人々が、自分が誰かの手によって統制されていないという認識を必要とする。だから、ヒットラーの時代の人々がなん百万と広場を埋めていても、それは独裁者による全体主義に他ならず、大衆の数をもって大衆社会とは言わない。

今日の大衆社会を概観して経験的に気づくのは、それが倫理道徳というものを明確に

低下させていることである。自由人たる人間には倫理道徳は天賦のものではない。生を享けてより、育ってきた環境の中で身につけていくのである。倫理道徳は性質的には社会的義務である。

人の罪悪を追及する検事長が女性問題で職を辞さなければならないのは、大衆社会時代ゆえの事件である。歴史的に見て、いずれの国々においても権力者は複数の女性を囲っていた。かかる摘み食いなどは話題にもならなかったであろう。しかし大衆社会の時代においては、特例は存在しないのである。

その相手たる女性が事の仔細を暴露するなども（あるいは暴露したとしても）かつては問題にもならなかった。一次的といえども男女の仲は公共の光に当てるような性質ではなかった。本来、粋筋、艶話であり、昔の女性であれば暴露などの行動は起こさなかっただろう。じっと心にしまっておけば、やがて若かりし時代のちょっといい話として晩年を彩ったやもしれぬ。

倫理道徳というものは、理想である。人間は理想的に生きたくても生きられないゆえしばしばドジをするのである。不倫などは両者ともに分かった上の行動なのであるから、天地に羞じるとしても、両者間の絆は後々残さねばならぬ。それが残らぬのであれば、

初めからかかる関係になるべきではなかった。

なぜこういうことになるのかと言うと、暴露をもちかけた奴がいて、なにがしかの金銭を掴ませたにせよ、両者間になんらかの感情的対立があったのにせよ、少なくとも暴露する側に自分が大衆の耳目を引き寄せるようなことがあってはならぬという非大衆意識がなかったのである。

倫理道徳は理想であるゆえ、建前にちがいない。建前通りに生きられない人間においては、このような問題で大衆の話題にならないように尽力しなければならない。なぜならば大人において、不倫は最大の刺激である。愛し合うこと、それを隠さねばならぬこと、倫理道徳的に許されぬゆえ、それだけ刺激的なのである。つまり不倫もまたエリートの所産でなくちゃあならない。

ところが大衆社会時代には王侯貴族ではなく、大衆もまた不倫を楽しむのであって、大衆には王侯貴族の粋がない。ありていに言うならばマナーがない。暴露を追及する大衆においても、暴露された関係者を特別の人とは考えない。関係者がそれなりにエリートであれば、追及は余計に執拗を極める。「水に落ちた犬を叩く」の所業となる。

大衆社会とは、人と人との間隔が上下左右に極めて近い。マスメディアによってス

パー・ヒーローが誕生するのも早いが、なにかミソをつければ、寄ってたかって叩かれる。ヒーローを作るのも大衆だが、潰すのもまた大衆である。

その大衆社会の背景に個人主義がある。個人主義とは個人が尊重される社会である。かつて国家存亡の危機などが大言壮語された時代には、個人は極力抑圧された。だから個人主義が幅をきかせる現代は結構な時代である。個人主義が賞賛され、隆盛するためには個人の徳義、倫理道徳が問われるだろう。

今は個人の徳義、倫理道徳が高まっているというよりも、壮大な嫉妬、羨望の暗雲が大衆社会を覆っているように見える。暴露し暴露されることが定着するような大衆社会の将来に寂しさを感ずるのである。

1999.4.12（月）

英雄待望論の危険

二四年前の石原VS美濃部の都知事対決では、いわゆる保革対決、自分はすでに東京で働いていたものの、単身赴任中であり、選挙権を移していなかったので、投票できないのを残念に思ったものであった。

美濃部候補に惜敗した石原氏が都知事に当選した。しかし美濃部対石原当時の輝ける保守の星という印象は、今や、ない。では果たして石原氏は市民派たる名に価するのであろうか。

ここしばらく総保守化が進んだと言われていたが、それはいわば保革が融和したことである。ＮＨＫの出口調査によれば、自民党は明石候補を担ぎ出したにもかかわらず、石原候補が自民党支持者の四五％を獲得したという。保守（現在の自民党だけではなく）の揺り戻しと見ることもできる。

庶民は強いリーダーを求めたのだという見方がある。石原氏の脳みそは、右翼民族主義的であり、とりわけ歴史感覚においては信頼度が低い。石原氏の強硬な対米姿勢はか

つての革新と相通ずる面があるが、彼の場合は要するに『重武装論』であって、直接外交戦略を展開することはないとしても、地方自治体の代表的首長である都知事が、元『青嵐会』の手に落ちたのは嫌な気分である。

そもそも都民が強いリーダーを求めるのであれば、都民一人ひとりが強くあらねばならない。常識的には都民が、強さの裏付けたる精神構造にあるとは考えられない。選挙戦術がいかに巧みであったとしても、石原氏が辿ってきた精神的遍歴を抜きに強さのイメージが評価されたとすれば、これは大変な錯覚である。

大衆がヒーローを作る時は、精神的には大衆社会における大衆の甘え、敗北である。大衆の群集回帰に過ぎない。歴史を顧ず、過ぎればすべてを忘れてしまうという日本人的美徳？が都知事選挙においても、またぞろ表面化したような気がしてならない。有名人が華麗に顔を並べた都知事選であったけれども、実は最善の選択なき選挙であったことを悔やむ。

1999.4.12（月）

No.二三七

典型的お節介の厚生省感覚

私はあの戦争中に『産めよ増やせ』という大本営発キャンペーンが張られたことを忘れていない。脳みその優等生というのは、時代が変わっても時に時代錯誤、アナクロニズムの精神がひょいと顔を出すらしい。『小さな親切、大きなお節介』という言葉もある。一見、新しい感覚のようで牢固とした感覚が覗くのは嫌な気分である。

『育児をしない男は、父とは呼ばない』というポスターをこの度、厚生省が発表なさった。少子高齢化に歯止めをかけたいという意図がうかがえるのであるけれど、これは『産めよ増やせ』の世紀末的表現である。

役人というのは因果な連中であって、全体の奉仕者たる立場を弁えない存在らしい。いいか悪いかは別として、子供を作るか作らないかは、まったくそれぞれの個性のなせるわざである。いかに有名なタレントを使おうと、言葉がおしゃれっぽい装いをしようと、その意図において人々のライフスタイルの指導、誘導につながるようなことはしてはならない。

ここには先ずとんでもない錯覚がある。女が子供を産まないのは、男が育児をしないがゆえにではない。そこには個別の様々な理由がある。その本質を思考せず、勝手に規定して、国費を使ったキャンペーンを張るのは本質的にファシズム的発想であるとしか言いようがない。

合計特殊出生率が全国平均では一・三九。その平均以下の地域を県単位でみれば、北海道、宮城、千葉、埼玉、東京、神奈川、愛知、大阪、兵庫、福岡となっている。東京などは一・〇五である。どうやら人口集中、大都市的ライフスタイルが影響しているらしいことはなんとなく読み取れる。子供を作るのは夫婦間のテーマではあるけれど、男が育児を手伝うの手伝わないのといった問題ではなかろう。たまさか今の時期、何がなんでも会社様のご意向うかがわねばならぬ風潮でもあり、ピンボケもいいところである。

とくに女性の社会進出と育児の両立が大変というが、それもおかしい。それを言うなら、女性が職場で存在感を示すようになって、ますます仕事が面白くなり、周囲の男どもがアホに見えたり、少しも格好よくなくて、なかなか結婚する相手が見つからず、結婚しても仕事が面白くて、継続するためには出産などしていられない。育児は夫婦でやろうが、分担しようが無償の行為、自分たちのしたいことを抑制せざるをえないゆえ、

自由に暮すには厄介な子供など作らぬほうがいい。

そもそも適齢期の皆様とて昔に比較すれば、人間的にはどんどん後退して、思春期は遅いは、自立期であるのに親元離れず、いつまででも親の脛齧り。先日、ある働く女性が言うには、三〇歳の働いている息子が「お母さん、退職金はいつもらえるの。結婚費用の当てにしているからね」と言うたと。とんでもない奴だと私は怒り心頭であるが、言われた親はなにやら嬉しそうである。アホやないか。こういう幼児的感覚、社会的停滞感が、この国の少子化の背景にあるのはまちがいない。厚生省の役人でも、案外、こういう手合いがいるのではないのか。

生活環境がよくなれば出産が増えるという解釈はおかしい。生殖たる行為は生存欲求に依拠する。つまり生存欲求は生存が脅かされる状態において一番強烈になる。だから、自分が生きられるのがやっとのバングラだの、インドだのでじゃんじゃん産む。ベトナム戦争真っ只中当時は、ベトナム民兵たちは戦争しつつ家族で移動しつつ、どんどん子供を作った。

わが国においては、なんだかんだ言うても歴史上最高の豊かな暮しをしているのであって、出産・育児に不具合な環境ゆえ少子化したのではなく、むしろ、余りに生存条

件がよく、自分がいつかは死ぬなどと露ほども思わぬ連中が増え、今を享楽したいがゆえに、遺伝子のことなどは考えなくなってしまったと診断するほうが妥当。

つまり生存欲求が決定的に弱くなった。加えて、他人のことなど考えぬ風潮の蔓延。一人で生きていけない社会なのに、慢心して一人で生きているような錯覚、罰当たり。連帯なき社会になっていることこそ少子化の最大理由ではないのだろうか。人生を考えず、生きている喜びを感じない連中が増えた社会で子供がたくさんできれば、それこそ異常であるぞ。

1999.4.19（月）

No.二三八

ショーたるプロレスの醍醐味

プロレスはショーである。かつて力道山の空手チョップに興奮した人々はスーパーマンがナイフで刺されて、あまりにもあっけない死を遂げたのを知ってなんとも興醒めな思いにとらわれた。しかしどっこいプロレスは生きている。もっともテレビ放映は極めて少なくなった。とある深夜、新日本プロレスの東京ドーム大会、大仁田厚VS蝶野正洋、「ノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチ」を見た。メジャー新日本プロレス対一匹狼の命を賭けた闘いという演出である。電流爆破デスマッチの感想の一席。

大仁田がパイプ椅子をもち、煙草をくわえて登場する。なんでも以前、煙草をポイ捨てして顰蹙かったので、今度は携帯灰皿持参なのだそうだ。蝶野はなぜかジープに乗って葉巻をふかしつつの登場だ。このあたりの競い合いは劇画風でおかしいのだが、本人たちは至極深刻にして凄みを出そうしている様子がうかがえる。

試合開始してさして格闘技くりだす間もなく、双方、二〇〇ｖの有刺鉄線に触れてバリバリッと白煙舞い上がる。レフェリーも巻き込まれてあえなくダウンして交代、やが

て二人も公平にリング上にへたる。格闘技によるグロッギーではなく、有刺鉄線に触れてふらふら。カウントダウンでドロー。ようやく立ち上がった蝶野がマイクを握るや「大仁田のバカヤロー」などと雄叫び、場外乱闘にでもなるのかと思いきや、蝶野が大仁田の脱ぎ捨てたジャンパーを着せてやってすたすた退場。「あいつはバカだ。しかし、やりたいことをやっている」と一言。

場面は変わり、控え室への通路での「大仁田劇場」の一幕。壁に背中をもたげて崩れるように座り、虚ろな目線がさ迷ったかと思うと突然、頭をもたげて「おいっ、なんとかあっ、いるかっ」と若いアナウンサーの名前を呼ぶ。

アナ「はいっ」

「俺は格好悪いだろっ」

アナ顔面蒼白で答える。

「そんなことありませんっ」

「格好悪いんだよっ」

「引き分けたじゃありませんか」

「バカッ、格好悪いんだ」

と叱えつつ、大仁田、仁王立ち、そして楽屋へふらふらと立ち去る。
またまたその後、第二幕、楽屋にて。
「愚かな人生、愚かな人生だっ、うっ、うっ」と泣く。
「蝶野さんよ、武士の魂受け取った。邪道、大仁田厚、泥の中からでもよみがえるぞっ。最終的には長州の首だっ」
なんでもこの日、五〇針以上も縫ったらしい。
電流に触れてバリバリッと白煙が立ち込める場面は凄まじい。これはスポーツではないかもしれない。格闘技そのものではないからだ。正統派新日本プロレスが反発するのは大仁田のショーマンシップに対してなのだろう。しかし新日本プロレスもまたショーにはちがいない。観客をショーとしてのプロレスに徹底的に巻き込み、唸らせてこそショーを仕掛けたほうの勝利であり、顧客サービスであり、その道を生きる自分の自己実現というのが大仁田流なのであろう。しかし、ショーとて危険であることはまちがいない。リングサイドの観衆の表情は引きつり、凍りついていたのも事実。カメラが楽屋まで入るお陰でなんとなく脚本、演出、出演の大仁田の事情もわかるような気がする。
死を賭してまで演技するに価するほど俺はプロレスが好きだ。だから死んでもいいし、

死ぬ覚悟で演じているのだ。にもかかわらず生き残ってしまった。死なないことが積み重なるとなれば、残酷な観衆はその衝撃にやがては馴れて、もっと刺激性の強いショーを求める。迫真のショーによって観衆を酔わせ続けるためには、さらに死への接近をショーアップしなければならない。人生は空虚である。空虚を凝視しつつ、なにか意味のある行為をやってのけたいと思う。このようなショーに生きなければならない。死ねないから格好悪い…と大仁田は咆哮したのであった。（プロレス評論家・奥井禮喜）

1999.4.26（月）

No.二三九

誰のために誰が行動するのか

G7外相会議で七項目の合意がなされた。

いわく、コソボ自治州における戦闘行為の即時かつ検証可能な終了、コソボからの軍隊・警察の撤退、効果的な国際的治安・文民の展開、安保理事会決議に基づく暫定統治機構の設置、避難民の安全かつ自由な帰還、実質的自治を実現する政治的枠組み合意、地域の発展と安定への包括的アプローチ。なお、空爆を続行するか否かについては、意見の相違があった。しかし、空爆は続行される。NATO事務局長によれば、空爆は問題解決の絶対必要条件なのだそうだ。

NATOによる空爆は、米国が三月二四日から最初の二週間で五億ドル、邦貨六〇〇億円をぶち込んだ。その間、アルバニア人が三、二〇〇人殺害されたという。避難民は、おそらくセルビア側の、民族浄化戦略もあってだろう、瞬く間に四〇万人を超えて、今も続々増加しているが、周辺の国はほとんどギブアップである。よってたかって空爆による力を見せつければ、悪漢ミロシェビッチ大統領が早々に降参すると踏んでの空爆で

あったことは間違いない。しかし大誤算であった。

セルビア人側にすれば、火事場荒しとでもいうか、空爆を、手をこまねいて傍観していることなどない。火事に便乗して、やれるだけやってやれと考えたとしても、まったく不自然ではない。

ＮＡＴＯの大義名分は、ミロシェビッチ大統領以下、セルビア人勢力による非民主的圧政を許せないと、まことに気高い。あたかも現代の十字軍が彷彿する。しかし、事はセルビア国内の政治である。人間の盾ということもある。物量作戦で容易に問題解決すると考えるのは、いかにそれが民主主義という大義名分を掲げているにせよ、容易に賛成できることではない。

民族問題はわが日本で考えているように生易しいものではない。

セルビア人は昔から勇猛果敢で鳴らしている。ナチスの時代、クロアチア人とアルバニア人はナチスに協力したが、セルビア人は断固として闘い抜いた。かつてはセルビア人がアルバニア人による民族浄化戦略によって六〇万人がセルビアへ逃げたという歴史がある。今、セルビアの人口二〇〇万人中、アルバニア人が八割を占める。圧倒的少数派のセルビア人がアルバニア人を蹴散らかしているという構図である。民族の怨恨を解

決するのは、やはり当事者同士であろう。言い分はそれぞれにある。この場合、果たしてＮＡＴＯの言う正義がそのまま通用するだろうか。

七項目の合意にしてもまったく一方的な言い分である。仮に、これをそのままミロシェビッチ政権に飲ませたとしても、この間、人々が味わった塗炭の苦しみ、あたかも神が突如として怒り狂ったかのような空爆が正当化されるのであろうか。正義を掲げればなんでもありか。人間精神に対して、物理的な力が果たして通用するか。

民主主義とは、自然児たる人間が、自分たちの社会を円滑に営むために考え出した方便である。それとて完璧なものは地球上に存在しない。それを絶対的価値として押し付ける。果たしてアルバニア人は喜んでいるのだろうか。

すでに戦争に敗北し、幸い戦争体験をせずに、のうのうと今日まで生き長らえてきた自分の頭は、このような戦争を遂行するリーダーたちの言葉が理解できない。このように激しい世界列国の中で日本は外交の舵を取らねばならぬ。だから重武装するんだよ、というような元太陽族的思想にも与しない。なんとかに刃物というが、傑出したリーダーに刃物を持たせるほうがもっと危険である。絶対価値のない人間において、ＮＡＴＯ的単細胞には、力こそ正義であるとする一九世紀的なアナクロニズムを見るしかない。

もともと民主主義とて、最初は単なる獣であった人間が、少しでもよりよい生き方をめざそうという理想の中から発生したのであろう。とすれば、わが島国日本に生きるわれわれとしては、もう一度、敗戦の地平に立ち帰って、平和戦略を進める唯一の経済大国となる道があるのではないのだろうか。単純に欧米の尻を追いかける時代は終わった。国家について考えよう。平和戦略を進めるユニークな国造りを開始することが、諸国から「反省せよ」と言われることに対する正解ではないのだろうか。

1999.5.10（月）

No.二四〇

ＮＡＴＯは戦略を変更せよ

ＮＡＴＯはまたまた誤爆だ。

際限なき空爆であるが、果たしてこのような方法が真に民主主義を守り育てる行為であるのか。無茶な話である。たぶん、ＮＡＴＯは、こんなに長い空爆になると踏んではいなかったのだろう。しかし、ミロシェビッチにしてみれば、がんばることしか存在理由はないのであって、自分一人が最後にいかなる災厄に見舞われるとしても、がんばるだけがんばるというのが、最もサバイバルに通ずるのである。しかも難民は九〇万人を超えたという。民族浄化にも好都合である。

おそらく誤爆の最大の原因は空爆が長引いたことであろう。次第に標的戦略的に低いほうへと変わっていくにつれ、詳細に調査していた対象から杜撰な対象へと変わっていくであろうことは分る。機械的には誤爆ではなくて、ソフトがすでに誤っているのに違いない。軍事アナリストの小川某辺りが、ここまで来ればミロシェビッチが降参するまで空爆を継続するしかないと言うのであるが、それは米国とＮＡＴＯの論法に過ぎぬ。

作戦が明らかに成果を挙げなかったとすれば、作戦変更するのが筋である。

なぜＮＡＴＯは作戦変更をしないのか。それは自分たちの被害がまったくないといっていい状態だからである。早く言えば、相手のいない戦争をやっているのに過ぎない。この戦争は空爆している側にとっては富士山辺りで行なっている米軍の演習となにも変わらない。自分に痛みがないからいくらでも、物量が続く限り空爆は継続する。空爆の大義名分はミロシェビッチの独裁、アルバニア人に対する弾圧を止めさせることであったが、いかにその意図が正しいとしても、すでに人々は塗炭の苦しみを味わっている。

千年にも渡って営々と続いてきた民族的対立を現代の武器が解決するとすれば、それは新しいジェノサイドを意味するであろう。ＮＡＴＯは避難民を弾圧していないかもしれない。しかし結果としてやっているのは避難民に対する弾圧である。

クリントンはどうかしている。最近の記者会見では、国連が関わっての問題解決でなければならぬなどと言うのであるが、元々国連決議抜きで暴走したのではなかったのか。やるだけやって具合が悪くなったらまたぞろ国連を引っ張りだす。それなら最初から国連としての行動がとれないことをなすべきではなかったのだ。

果たしてベオグラードの中国大使館誤爆なるものは誤爆であったのか。容易に空爆で

決着すると見込んで空爆を開始し、やるだけやったが、いつまでも相手が降伏する見通しが立たない。ミロシェビッチの肉を切らせて骨を切るの戦略に負けているのは明々白々だ。ＮＡＴＯには空爆という戦術はあったが、アルバニア問題解決の戦略がなかった。ミロシェビッチは完全降伏しない限り負けではない、つまり敗北がない。ＮＡＴＯと避難民にとっての勝利なき戦争とミロシェビッチにとっての敗北なき戦争という二つの側面が浮き上がってきた。

打つ手のなくなった米国はじめＮＡＴＯは国連を引っ張り出すしかない。しかし元々国連を無視して開始した空爆である。どの面提げて国連を引っ張り出すか。そこで中国大使館を誤爆を装って爆撃する。予定通り中国は怒り心頭、国連を舞台にロシアを引き出しての新しい動きが始まる！とまあ、ここまで性質が悪いとは言わないけれど、思想的にも、科学技術においても、経済においても、『世界を指導しようとしている米国と盟友ＮＡＴＯ』が誤爆などするわけはあるまいと思うのも一つの考え方ではなかろうか。

日本人は無宗教の人が圧倒的に多い。

かの国々の人々はしばしば議会演説においても神に祈りを捧げ、毎週日曜日には教会へ赴いて懺悔なさる由ではあるのだけれど、神の名を掲げつつ、壮大な他人の不幸を招